

# 認知症ケア最前線

## Vol.2 認知症とは

今回は「認知症とは」という事で、引き続きニッセイ財団シンポジウムで行なわれた、東京都老人総合研究所の本間昭さんの記念講演「認知症対策の最先端」について感想を交えて報告させていただきます。(所長：石塚)

### ～どのような病気なのか～

前回は「認知症」という言葉を知っていても病気だとは認識をしている人が少ないという実態が社会にあるということをお伝えしましたが、再度繰り返しお伝えしたいことは**「認知症」は誰もがかかる病気のひとつだと言うことです。**

「認知症」は医学的に定義された言葉であり、世界中どこに行っても通用します。「認知症」とは、脳や身体の病気によって、記憶力や判断力、計画力などが障害されて、普段の社会生活に**持続的に支障を来している状態**を言います。脱水症状などで引き起こされる、せん妄状態など一過性のもの、一時的なものとは区別されます。

一般的に広がってしまったイメージとして、認知症は「徘徊する」「暴力を振るう」「興奮しやすい」「すぐ怒り出す」などの状態をさしているようにとらわれがちですが、これらは「認知症」本来の症状ではありません。記憶力や判断力、計画力が障害された上に様々な環境要因が重なり、先ほどあげたような症状が現れることがあるという事が正しい理解と言えます。

また、認知症はアルツハイマー型認知症をはじめとして様々な原因で起こりますが、75歳以上では5人に1人、つまり20パーセントの方が認知症と診断されており、ごく身近な病気であるとも言えます。



### ～私は誰になっていくの～

さて続いて、認知症は治療できるのかという事になりますが、前回もお伝えしたとおり、認知症に有効な薬も開発され、早期にアルツハイマー型認知症の治療を始めることができれば、その進行を50%遅らせることができるということです。

また、抗認知症薬を服用すれば、「徘徊する」「暴力を振るう」「興奮しやすい」「すぐ怒り出す」という周辺症状の出現を抑えることもできます。さらに、原因によっては外科的な治療で回復する場合があります。



そして、認知症の治療を行なうために大切なことが、認知症を早期に発見することであるといえます。認知症を早期に発見し治療する最大の意義は、本人に病気の説明ができることだと本間氏はおっしゃいました。長くなりますが、ここで来日をして講演をしてくださったこともあるオーストラリアのクリスティーン・ボーデンさんの言葉をその著書である「私は誰になっていくの」(クリエイツかもがわ)から引用したいと思います。

私は認知症患者ですが、だからと言っておびえたり恥ずかしがってかくれていたくはありません。認知症は、他の病気と同じようにひとつの病気であることを知っていますし、認知症患者も、敬意を払われ尊厳を保たれるべき価値のある人なのです。

執筆の時にも根本的な治療はありませんでしたが、抗認知症薬のおかげで私は良く機能を保ったまま留まっています。私はできるだけ長くこのまま良い状態に留まり、この数年間のうちには何か有効な治療法ができて、それを利用できるようになるかもしれないという希望をもちつつ、前向きに認知症と共に生きています。

私は認知症を持つ人たちが希望を持って生きられるように励ましたいのです。しっかりと生きましょう。毎日を精一杯に生きて、あなたが今まだできることを楽しんでください。ゆっくりペースの生活の中にある良さを知ってください。私たちがうまくやっっていけるように助けていただき、そして穏やかで前向きな生活を送れるように励ましたいのです。

私達が認知症であっても、たとえそのために理解しがたい行動をとったとしても、どうか価値のある人としての敬意を持って私達に接してください。

## ～日常の変化を見逃さない～

この語りを聞いて、なんと、励まされる言葉だろうと思いますし、この考え方が普通になれば良いと思いました。私自身も、ボーデンさんと同じように考えておられる人たちが、何人もこの栄区に住んでいらっしゃることを知っています。

そして、早期に認知症を発見し治療につなげることは、認知症を持つ方のご家族が、認知症の特徴を踏まえた介護やケアをするための準備をすることにもつながった事例を数多く知っています。今回の終わりに、ご家族が気付いた認知症の初発症状の多いものを順にいくつかあげて締めくくらせていただきます。

- 1、同じ事を言ったり、聞いたりする。
- 2、物の名前が出てこなくなった。
- 3、置き忘れや、しまい忘れが目立った。
- 4、以前はあった関心や興味が失われた。
- 5、日課をしなくなった。
- 6、身だしなみが乱れてきた。だらしなくなった。
- 7、時間や場所の感覚が不確かになった。
- 8、計算の間違いが多くなった。
- 9、財布を盗まれたと言う。
- 10、ささいな事で怒りっぽくなった。



大切なことは、ここで挙げたような日常の変化を見逃さないこと。少しでもおかしいなと思ったらかかりつけの医師や地域包括支援センターに、早めに相談してみてください。（了）